

ホームページ http://www.geocities.jp/tohoku_univ_wv_ob/

メールアドレスの変更は利根川さんに連絡して下さい：s-tonegawa@ac.auone-net.jp

メールアドレスが不明な方へはOB会報を郵送してきましたが、来年からは原則としてTUVVOB会のホームページへの掲載のみとします。郵送をご希望の方は、最後のページの事務局（8期 佐藤）までご連絡ください。

鈴木ハツヨ先生との会食

7期（昭和43年卒）真尾 征雄

以前から同期の上田俊朗君と、仙台で鈴木ハツヨ先生を囲んで会食をしようと話しておりました。11月7日に上田君が来仙するのに合わせて、同期の国岡君と手戸君にも声掛けして、同期4人で鈴木ハツヨ先生を囲んでの会食をしました。

会場は先生の提案で、仙台では洒落た雰囲気で有名な勝山館のイタリアレストラン「Padrino Der Shozan」です。30分ほど前に着いた時には、先生はすでにおいででした。「今日は先生の快気祝いですから、ここはお任せください」と話したところ、「それはダメよ。ここは高いのだから、これを足しにして」と有無を言わず「志」を渡されてしまいました。

定刻には全員集まり、優雅な会食が始まりました。庭園を愛で、ウェイトレスの料理の説明にうなずき、白ワインを味わいながら、小声で会話。赤ら顔で声高に話し、酒をグイグイ呑み交わすいつもの同期会とはだいぶ違います。

先生は84歳で、今年膀胱ガンや緑内障の手術をされましたが、術後の経過もよく非常にお元気の様子でした。県から頼まれて今もやめられないでいる調停関係の仕事や、仙台日独協会の副会長としての様々な活動をされており、相変わらず多忙のようです。特に大震災以降は、ドイツからの様々な復興支援に対し、現地の窓口としてボランティア活動されていたようです。日常生活では自宅の掃除や買い物には、以前研究室にいた女性に来てもらっているが、料理は自分で作っているとのこと。今年が祿彌先生の七回忌で12月にされるそうです。昔のことから最近の人の名前まで記憶力は我々より遥かに上で、「先生は昔と少しも変わりませんね」と話したところ、返事は「前はもっとスマートだったわよ」でした。帰り際にはお土産までいただいて、今日の会食の趣旨が分からなくなってしまいました。

先生をお見送りして、4人で駅の蕎麦屋へ直行。満腹なので酒だけ注文し、やっといつもの同期会になりました。先生にとっては、我々はいつまでも世話のかかる学生なのではないでしょうか。



7 期同期会 in 佐渡ヶ島

7 期佐渡同期会幹事 村山貞一・高橋直樹・藤森英和

7 期では毎年旅行を兼ねて各地で同期会を開催しています。今年は佐渡ヶ島で同期 16 名が参加し、6 月 22～24 日の 2 泊 3 日で開催しました。佐渡の魅力は何と言っても「孤島ゆえの自然」、



「孤島ゆえの伝承文化」、それに「流刑地にちなむ移入文化の伝承」であり、これらを巡る旅となりました。

初日 6 月 22 日は新潟港に集合し、フェリー船中は早速ワングルらしく車座の宴会となりました。夕食後、春日神社の能舞台で举行された薪能・高砂を鑑賞、あわせて有名な民謡集団・立浪会による佐渡おけさ、相川音頭などの民謡踊り、そして昔から伝わる子孫繁栄五穀豊穰を祈念する神事“つぶろさし”を鑑賞、文化的な夕べを過ごしました。

翌日 23 日

は午前中、佐渡

金山を見学。従来の坑道内の作業だけでなく、近代鉱山の草分けとしての諸施設、例えば選坑場跡あるいは運搬施設等を見学し、ハード面とそこに携わった鉱夫等、人々の生活にちなむソフト面を知りました。佐渡ではこれらの施設を世界遺産登録すべく活動中です。

午後は外海府海岸の自然を周遊。海岸のフィヨルド景観、花の盛りを過ぎて残念でしたがトビシマカンゾウの大群落地、その他、木下順二の戯曲“夕鶴”や森鷗外の小説“山椒大夫”にちなむ達者海岸などが印象的でした。

23 日の夕食時に鬼太鼓を鑑賞。昨夜の能、民謡、神事を加えると佐渡の伝承芸能のかなりの部分を鑑賞したことになります。



翌日 24 日はもう一度佐渡の文化を探るべく佐渡博物館、佐渡歴史伝説館等を見学しました。

最後にトキの繁殖施設であるトキの森公園を見学し、今年の同期会佐渡旅行を無事完了しました。



7 期同期会本番は 23 日の夕食時に行い、参加者の近況報告と来年の同期会旅行概要を決めました。近況報告は健康上の話題が多くなり、中には同期会終了後に手術予定の方もおられ、お互い歳を自覚する場面もありましたが、来年度の武田信玄ゆかりの甲府同期会（幹事：大木、矢崎）での元気な再会を約束し、万歳で終了しました。

このような同期会が今後も出来るだけ長く続くよう念じつつ、二度の佐渡旅行幹事反省会@東京を重ね、ようやく本報告が完成いたしました。

8・9 期合同山行 女川応援

9 期（昭和 45 年卒）原田 博夫

2 年半前の大震災で同期の藤中君が被災し、近年ずっと合同で OB 山行を行っている 8 期・9 期を中心に『藤中サポート』を立ち上げ、藤中を通じて、あるいは直接女川の復興を応援してきました。

今回の 8・9 期合同山行は、藤中が今年『NPO 女川ネイチャーガイド協会』を立ち上げたこともあり、女川にまだ行ってない人もいたので宿泊や買い物をして応援したり、現状（復興状況）や自然

を見るという目的で女川になりました。

参加者は8期小笠原夫妻、根岸夫妻、前田夫妻、中里さん、水上さん、三原さん、9期ケンチョ夫妻、富川夫妻、石野、川田、桃谷、藤中、原田の18人。

1日目の9月7日は12時19分浦宿駅（石巻線の現在の最終駅）集合の予定になっていたが、ケンチョ車は車の不調で5時間位遅れそう、時間通りの人達は希望の鐘商店街（仮設商店街）にある藤中塾堂内で昼食の海の幸たっぷりの女川丼を食べた。

昼食後はまず地域医療センター（旧女川町立病院：港の正面の高台にあり海拔16mに建っているが、1階の約2mまで波をかぶっている）の駐車場から被害のあった建物や地盤嵩上げのために運搬され山積みされた土砂があちこちに見られる。その後、センターの後に続く急なコンクリート階段を登り熊野神社まで行く。遠くの島がかすんで見え、神社の脇から続く山道から藤中達が整備している草刈り機のエンジン音が聞こえてきた。

次に総合運動公園に行き、工事中の災害公営住宅（旧陸上競技場をつぶして建設、藤中は1次募集はずれ）や外観は他の仮設住宅より綺麗な2・3

階建の多層コンテナ仮設住宅を見た。商店街に戻り、いくつかの店で土産の買い物をし、本日の宿であるトレーラーハウス宿泊村エルファロ（宿泊部屋・レストラン・事務所がトレーラーに車載され、震災で流された旅館主が理事長）に着く。ケンチョ車も無事着いて、レストランで食前飲み会、食事の後1つの部屋に17人が集まってトリンケンミーティング。

2日目は朝早くから2020年オリンピックが東京開催のニュースがもちきりの話題になったが、天候は雨、とにかく朝食を済ませ奥清水桜公園に移動し、『女川桜守りの会』がボランティアの方々と5月に植えた枝の先に鹿の食害防止のペットボトルをかぶった大漁桜の植樹地を見る、大きく育ちますように……。その後、商店街に行き、近隣の浜をドライブするグループと藤中が整備している33観音を巡り、熊野神社から照源寺に出るコースを歩くグループに分かれた。歩き始めは雨が降っていたが、だんだん小雨になり終点では止んでいた。照源寺からは商店街に戻っている前田さん

に迎えに来てもらい、医療センターに乗り捨てた車を取りに行き、再び藤中塾堂に行き、予定では大六天山（440m）で食べることにしていたおにぎり弁当（これは商店街の洋品店ダイショウのママさん手作りの煮物付おにぎり）がおいしい。食後商店街をブラブラして「来年また会いましょう」と明日伐採作業を手伝う予定のケンチョ夫妻・石野を残して各車出発。

最後に、コーヒーの差し入れをくださいました濱さん、雨天で外では飲めなかったもので、みんなで分けて持ち帰り家でいただきました。ごちそうさまです。

追記：個人的なことですが、高政でかまぼこの土産を買ったのですが財布を落とし、翌日電話をしたところ「駐車場に落ちてましたヨ、仮設商店街の交番に届けました」との返事、それを聞いて女川への印象がますます良くなりました。



トレーラーハウス エルファロ(灯台)



女川桜守りの会の旗は7期からの寄贈

TUWV卒業40周年の二口行き

12期（昭和48年卒）神山 文範

今年是我々12期が卒業して40年。20周年（二口）、25周年（朝日）、30周年（鬼怒沼）、35周年（TUWV創設50周年と兼ねて泉）と集って山歩きを楽しんできた。今回も、関西在住の雨宮が5月と8月に東京に出張してきた機会に集まって話し合った結果、10月18－20日でささやかだが記念に二口に行こうという話になった。

18日雨宮、蔭山、松井と僕が無事仙台駅に揃い（真利子女史は残念ながら都合付かず）、駅東口の半田屋で昼食後（場所も変わり近代化したが同じシステムで安い）、レンタカーで片平（法文1号館が無くなっていたが、図書館は資料館となっていた）、青葉山（なんと土木の建物が大震災の被害で建て直していたが、樫が大きくなり道を覆っていた）、城址（仙台も高層建築が増えた）経由で盤司山荘着。当日の宿泊客は我々のみで、ゆっくり風呂に入って持ち込みの泡盛で宴会。明日の相談となったが、初めからの蔭山に加え、松井は足の古傷で、雨宮も直前のぎっくり腰で樋の沢往復となり、大東登山は僕だけとなった。

19日、僕は8時発で大東に向かい（頂上は霧が出てきて眺望無かったが樋の沢へ少し下ったところで懐かしい南面白が見えた。紅葉はイマイチ）、3人はゆっくりと樋の沢に向かい、樋の沢で11時40分に集中（?）。立派な避難小屋わきで昼飯（盤司山荘の半田屋顔負けのお握りと即席ラーメン）し、大行沢沿いの道を賑やかに散策して仙台に帰ってきた。

さて、夜は楽しみにしていたおでん三吉。実は、仙台の夜は4人では寂しいので（12期は学内紛争が激しい時に川内時代を過ごしたので卒業者は5人）、仙台在住の卒業年次の近い人や、途中退部した仲間も誘っていた。10期の野家さん、11期の近田さん、同期の佐藤（衆介）、富井、渡辺で計9名が集合。また、同期の吉村（現役クライマーで北岳バットレスや御在所の岩場の写真を送ってきた）が写真で参加。雨宮差し入れの森伊蔵で瞬間に40余年の時を飛び越えて、1年の時の夏合宿の話などに花が咲き、次回は佐藤（東北大教授「牛博士」で、鳴子で研究）の退官記念で鳴子に集まろうということになった。

樋の沢にて（H25. 10. 19）



カミさんとのスイスの旅

3期（昭和39年卒）岡 好宗

今年の夏、ヨーロッパ旅行の総仕上げとして、『どの国に行こうか(?)』ということになった。カミさんと相談。この国がいい、あの国にはもう行ったね。今年は、お城や宮殿・美術館ではなく自然がいい等々、いろいろ検討した結果、意見が一致してスイスに行くことになった。マッターホルン、モンブラン、アイガー、ユングフラウ等々ヨーロッパが誇る名峰が頭を過ぎる。『ツェルマットもサンモリッツも良いな～、良いね～』と言うことで意見が一致したのである。

旅行会社にツアーの申し込みをして、旅行代金の払込も済ませ、もう一度ツアーの内容を再確認したら、何とトレッキングが4回もある。いわゆる全くの『観光旅行だけ』ではない。標高3000mを超える山岳の標高差300m～500mをトレッキングすると言う、さあ困った。2008年10月・TUWVの創立50周年記念行事の時、『泉ヶ岳』に登った時のことを思い出した。あの時はバテた。恥ずかしながら本当にバテた。

今を去る50余年前の学生時代に、『泉ヶ岳まで歩いて行こう』と言う事で、川内の部室を夕方出発して夜通し歩き、朝、麓についてそのまま登り、そしてまた歩いて川内の部室まで帰っても何でもなかった自分が、記念行事の時は、麓の小屋から頂上までの登りだけで、バテテしまった。

さあ、今度は標高3000mを超えるスイスの高地でのトレッキングだ、バテないかな～(?) 何しろ富士山の頂上より高いところにも行くのだ。空気も薄いだろうな～。高山病にならないかな(?)。そこでツアー会社に聞いてみた。『私が最年長ですか(?)』、『高山病は大丈夫ですか(?)』そうした

ら『大丈夫です。もっと年上の方も参加されています。』とのこと。よ～し、それでは負けてられない。 カミさんと一緒にトレーニング開始。

スイスはチューリッヒ空港に到着、ツェルマットで見る『朝焼けのマッターホルン』をかわきりに、アイガー、モンブラン、ユングフラウ等々の雪山を見て、スイスの絶景を巡る4大特急に乗ってのお決まりの観光旅行、それに加えて4回のトレッキング、さあ、出発だ。

お天気は稀に見る晴天、晴れ～！4000mを超える山々は、雪と氷を被って美しく青空に映え、氷河の氷は青白く光っていました。氷河は残念ながら日本にはありませんよね～。ツェルマットでは天を突きさすマッターホルンの雄姿と、湖面に映る逆さマッターホルンを満喫、富士山の頂上(3776m)を超える高さの展望台(＝エギュー・デュ・ミディ展望台・標高3842m)からのモンブラン(4810m)の眺めは、これまた最高。



それにしても、よくもまあ、こんな高い所まで、電車を走らせ、硬い岩盤をくり抜き、展望台を造ったものだ。電車もアプト式・歯車でゴリゴリ登って行く。こんな高い所に展望台を造ろうと考えただけでも凄いのに、本当に造ってしまうのだから、恐れ入りました。その執念というか、努力というか、意志の強さには、驚き以外の何物でもない。感服・感服、『人間とは本当に凄いな～』を実感いたしました。

ユングフラウ(4158m)の展望台(＝スフィンクス展望台・標高3571m)からの帰り道、初級トレッキングの一つである『アイガーグレッシャーからクライネシャイデック』まで歩きましたが、途中、我々が『仙台二高の大先輩・榎 有恒氏』が、アイガーの東山稜を1921年(大正10年)に初登攀した事を記念して寄贈した山小屋が、博物館として残っております。

榎有恒氏は、日本山岳会の創立者・会長で、ヒマラヤ山脈の8000mの未踏峰の一つ・マナスル第3次登頂隊長として、日本隊のマナスル初登頂(1956年・昭和31年)を成功させた人。その世界的偉業のあと、母校の仙台二高の講堂で記念の講演をなさいました。

(私・岡は、当時仙台二高に在籍していたので、直接、大先輩の講演を聞くことが出来ました) そんな大先輩に敬意を表し、少し遠回りして、その山小屋の中を覗き見てまいりました。

氷河を歩き、氷河のトンネルをくぐり、有名な『アイガーの北壁』を目近に見てまいりました。

マッターホルンを始め、ヨーロッパの誇る名峰が青い空に映えて美しく、本当に圧倒される思いでした。旅行中、我々が行く日に限って、山々はピンポイントで晴れ、予定された4000m級の山々をツアー中に全部見る事が出来たのは、珍しい事と、山岳ガイドが言っておりました。本当にラッキーでした。(一つか二つはガスツテ雲の中だそうです。 そういえば、富士山も雲に隠れ、見えない日がありますよね～。)

心配された酸素の薄い(?)標高3000m超の『雲の上のトレッキング』も無事にクリアー、と言うよりも、晴天に恵まれトレーニングの甲斐あってか、余裕(?)をもってクリアーいたしました。

スイスは、期待以上に美しい国・素晴らしい国、期待以上の思い出を残してくれました。そして、今回のカミさんとのスイスの旅は、最高の旅となりました。



毎年恒例、冬の八甲田と千人風呂

3 期（昭和 3 9 年卒）後藤 龍男

毎年恒例の冬の八甲田へ出かけました。目的は八甲田山のスノートレッキングと酸ヶ湯温泉での湯治です。ちょうど日本列島に寒波が襲来していた時期で、酸ヶ湯温泉は観測史上最高の 4 メートル 5 0 センチの積雪でした。宿の手前 1 キロのところで猛吹雪のホワイトアウト状態になり、車が前に進めません。5 0 センチ先も見えないので車が吹きだまりにスタックし、危うく宿にたどり着けないところでした。宿から救援を呼ぶ羽目になりそうでした。

1 週間ほど前、北海道の国道が吹雪でホワイトアウトになり、車に乗った親子が自宅のすぐ手前で遭難死しましたが、ホワイトアウトの怖さがよく分かりました。たどり着いた酸ヶ湯温泉は、玄関先が雪で埋まっていました。

翌日は吹雪。八甲田山ロープウエーも止まっているのでどこへも出かけられません。終日酸ヶ湯温泉名物の千人風呂を楽しみました。乳白色の湯に浸かっていると天国です。浴槽でなにやら工事をしています。聞くと混浴の大浴場に女性用のしきりを作るとのこと。若い女性の入浴を覗き見る不届きものが増えたからとか。酸ヶ湯の千人風呂にしきりを付けるとは、無粋な世の中になったものです。

三日目は天候が回復し、ロープウエーも動きました。八甲田山頂上駅までロープウエーで上がり、はるか下方に見える酸ヶ湯目指して大雪原のダウンヒルです。頂上駅は風が強く、斜面がアイスバーン状態で歩きづらかったのですが、少し下りかけるとふかふかの新雪。スノーシューを履いていても腰まで雪に埋まります。スキーの連中は構わずどんどん行ってしまいます。中腹の毛無岱まで下りると素晴らしい雪原が広がっています。夏は見事は湿原です。冬の八甲田の醍醐味といえましょう。途中でコーヒーを飲んだり、写真を撮ったりしながらの楽しい 2 時間でした。



さまよえる湖

4 期（昭和 4 0 年卒）小原 佑一

現役時代、何の気なしに読み始めたスウェーデンの探検家、スヴェン・ヘディンの中央アジア探検記「さまよえる湖」は自分の山行きに多大な影響を与えた。ヘディンは少年時代から探検家になることを夢み、北欧の寒い冬も薄着で通し、夜はよく外で寝たとか……

自分も、いつかは「さまよえる湖」ロプ・ノールに行ってみたいと中央アジアの地図を眺めながら沙漠の旅を想像していました。しかし、1964 年中国最初の原爆実験がロプ・ノールで行なわれたとの報道はものすごいショックでした。



個人でロプ・ノールに入るのはほとんど不可能だったのですが、敦煌から西方、雅丹（ヤルダン）国家地質公園の魔鬼城まで行くシルクロードの観光ツアーが見付かり2007年秋、敦煌から玉門関を通り、荒れた道をさらに西へ。途中、人民解放軍の演習地を通過し、風化した台形の小山が連なるヤルダン地帯へ。昔の探検家はこのヤルダンの複雑な地形に行く手を阻まれてやむなく引き返した探検隊もあったとか、今は舗装された道路が一直線に地平線の彼方まで、だが一般に開放されているのはここまで・・・



今度はロプ・ノールの西側から近づいてみようと思いを眺め、情報収集。最近のGoogle Earthの衛星写真によればロプ・ノール周辺に巨大な貯水池のような人工施設が新たに建設され、さらに新疆ウイグル自治区のタクラマカン砂漠では石油、天然ガスが見付かり砂漠横断道路など開発がものすごい勢いで始まっているとの情報。

今年になって西域南道とタクラマカン砂漠を巡る観光ツアーが催行されるという情報をつかんで、この機会を逃したらダメかもしれないと参加を決めた。

ヘディンの「さまよえる湖」ロプ・ノールはタクラマカン砂漠の東端、コルラとチャルクリクを結ぶ道の東側200キロ辺りにあったはずだろう。現在のタリム川はコルラの南から南東に国道218号線沿いに南下して、崑崙山脈北側、タクラマカン砂漠の南端を流れてきたチュルチュン河とつながるような形で大きな湖を形成しているみたい。



砂漠の中の大きな大きな水溜り。ヘディンの描いたスケッチの挿絵を見ても、当時のロプ・ノールはこんな景色だっただろうと想像できた。

昔、ロプ・ノール、楼蘭、米蘭（ミーラン）の傍をシルクロードの一部（西域南道）が通っていて、その道を玄奘三蔵は天竺インドからの帰路、仏教の経典を携えて通過し、またマルコポーロもこれから向かう東方の国々を考えながら通っていったことだろう。

砂漠の風景は今も昔も変わっていないだろう。玄奘三蔵もマルコポーロもそして後世の探検家たちも同じようなこの砂漠の景色を見ながら進んでいったんだろう。



パタゴニア 再チャレンジ

5期（昭和41年卒）八木 真介

今年1月に再びパタゴニアに出かけた。パタゴニアには一昨年行ったが、現地住民の交通閉鎖によってほとんど目的を果たせなかった。今回はその再チャレンジである。

パタゴニアは南アメリカ大陸の南端のチリとアルゼンチンにまたがるエリアを言う。今回のトレッキングはパイネ山群とフィッツロイ山群という2つの山域を歩き、その間に有名なペリト・モレノ氷河の見物クルージングがあるというものである。

ツアーは、米国経由でチリの首都サンチャゴへ、国内線に乗り換えて南アメリカ大陸最南端の町プンタアレーナスに飛び、そこが起点となる。とにかく長い長い飛行機の旅である。プンタアレーナスからは車でパイネ山群に入った。

パイネ山群は大きな山容のパイネ・グランデ、上から黒・白・黒と大きな縞模様が作る不思議な景

観と奇妙な形の山頂を持つクエルノ・デル・パイネ、4つの巨大な岩峰がそびえるトーレス・デル・パイネが西から並ぶ山群である。トレッキングはパイネ山群全体を見渡せる湖のクルージングから始まった。残念ながらパイネ・グランデは雲の中で見えなかったが、面白い景観を楽しめた。トレッキングはこれらの山のふもとをいくつかの氷河湖ぞいに山小屋泊まりで3日間で歩く。初日にはパイネ・グランデの山頂と大岩壁の素晴らしい展望を楽しんだ。3日目は本格的な登りがあり、トーレス・デル・パイネの4つの岩峰を間近に望むモレーン湖までの往復である。巨大な岩の塔とも言うべき4つの岩峰は湖から2000m以上の高度差でそびえ、さすがに迫力がある。

パイネの後は、車で国境を越えてアルゼンチンに入り、翌日はペリト・モレノ氷河の見物である。ここは、一昨年も来た。

フィッツロイはセロ・トーレとフィッツロイという2つの主峰をそれぞれ間近に見られる2つのモレーン湖を巡る3日間のテント泊のトレッキングである。トレッキングはまずセロ・トーレのベースキャンプを目指し、その近くのモレーン湖からセロ・トーレが間近に見られる。セロ・トーレは刀の刃のよう形にするどくそびえ立つ岩峰で、すごみと美しさを感じられるものであった。

2日目にフィッツロイのベースキャンプに移動し、3日目にフィッツロイを間近に望む山上湖まで急な斜面を往復した。フィッツロイは丸みを帯びた巨大な岩峰で、堂々とした姿である。これらの岩峰群は見事な姿に加えて、岩肌が朝焼けでまさに真っ赤に染まるのも実に素晴らしかった。

トレッキングの後は、ブエノスアイレス、米国経由の長旅で日本に戻った。



セロ・トーレ



フィッツロイ

国師ヶ岳と小檜山(足慣らしが本命になって)

6期(昭和42年卒) 加藤 邦明

昨年の10月に大弛峠から西側の金峰山に行ったので、今回は東側の国師ヶ岳へ行くことにした。大弛峠からの国師ヶ岳だけでは運動量が不十分なので、帰りがけに焼山峠からの小檜山にも行くことにした。

国師ヶ岳

大弛峠を7月10日の8:55に出発し、夢の庭園への分岐、前国師岳、北奥千丈岳への分岐、富士山の美しい眺望地点である国師ヶ岳(2592m)には9:48に到着した(のんびり歩いても、峠から53分であった)。

足元に一級三角点を確認して、北奥千丈岳分岐経由で北奥千丈岳(2601m)には10:13に到着した(ー10:35/晴れ)。北奥千丈岳分岐、夢の庭園分岐、木道の夢の庭園から大弛峠には11:20に戻った。大弛峠から川上牧丘林道を下り、焼山峠には12:03に到着して昼食とした(ー12:23/晴れ・暑)。

小檜山

高低差の少ないハイキングコースを小檜山へと辿る。1653mピーク、的石、小檜峠分岐、一杯水(滴水状態)、景色バツグンの小檜山には13:47に到着した(峠からの所要時間は1時間24分)。小檜山は山梨百名山の一つで、二等三角点であった。14:02に山頂を出発し、峠分岐(曇り)、的石、旧・新道の分かれ、巻道、駐車場には15:00に戻った。



金峰山を背景に



富士山は秀麗



小樽山



ミツバオウレン



ゴゼンタチバナ



シラビソ

九州と北海道の旅

8 期（昭和 44 年卒）相原 敬

一昨年の五月連休に四国九州の山を精力的に駆け抜けた。遠方の山選びで参考にするのは、やっぱり深田百名山や花の百名山になりますね。四国は剣山・石鎚山そして九州に移動して阿蘇・祖母山・九重に登った。そのときは往復マイカー利用だったので 2800 キロ余りの長駆だった。昨年の夏には一週間ほど仕事をさぼって北海道に渡り、大雪・十勝・富良野岳の花旅を楽しんだ。

九州について言えば当時は新燃岳の噴火があり南部の霧島連山等はカットしたので後年の宿題になったし、北海道についてはそのスケールの大きさに魅了されたものだった。ワンゲル在籍のころは貧乏学生だったので、九州の山はもちろん北海道の山も計画さえする気がなかった。



剣山



阿蘇山



大雪/赤岳



富良野岳

九州にも行きたい、北海道にも行きたいということで、今年は両方の山旅を欲張ったのである。まだ現役生活をしているので日程の余裕はそれほど見込めなかったが、五月連休にミヤマキリシマの高千穂峰・韓国岳そして開聞岳に登ってみた。一生に一度と思えば楽しい旅行ではあったが、山そのものの魅力としてはやや平凡な感じがした。

翻って北の大地北海道はイメージからして解放的で素晴らしい。梅雨がないという好条件は怪しくなっているが、咲き誇る高山の花や雪渓を抱く山容に飽くことのない展望は忘れることができない。しかしこれは天候や訪問する時期に大いに左右されるだろうことは自明であるが、許されるなら毎年でも行きたくなる北海道だった。



高千穂峰



利尻岳



礼文島



大雪/北鎮岳

フェリーを利用する気楽な船旅もまんざらでもない。そして何処に行っても殆どが今流行の車中泊であって、風来坊にとって道の駅や日帰り温泉などの各種施設の充実もありがたい。道内の道の駅などは車中泊で長期間渡り歩くリピーターで溢れている。

アンダルシアの白い岩壁そして青い空と碧い海

8期（昭和44年卒）佐藤 拓哉

アンダルシアの白い大きな岩壁はクライマーの憧れである。見渡す限り続くオリーブの林の彼方に聳える石灰岩の壁は、青い空とのコントラストが美しい。冬にヨーロッパ各地からクライマーが集まるスペインの岩場の中でも最も有名なアンダルシア／エル・チョロが今回の舞台である。写真を見るとすべて垂直、と言うより被っており、とても登れそうにない、と思いつつ足が向いてしまった。

今回のスペイン旅行は、いきなりトラブルから始まった。マラガ空港で荷物を受け取ろうとしたところ、一つがまだパリ・シャルルドゴールにあるという。翌朝に着くというので、アパートの住所を伝え、取り敢えずレンタカーでロザリオ村に向かった。高速道路からも一見してそれと分かる「白い村」である。車が通る時は人が壁に貼り付かなければならないような狭い迷路を通してようやくガイドの家に着いたところ、今度は誰もいない。近所の人が集まってきて心配してくれるが、英語とスペイン語とはほとんど通じない。それでも、ようやくイベントに行っているらしいということで、夕食を食べてからまた来てみたが、やはり留守である。近所の人が電話してくれ、まだイギリスにいることが分かった。何と云うことか、途方にくれていたところ、仲間のガイド（面倒をみるよう頼まれていたとのこと）が現れ、ようやくアパートに落ち着くことができた。仲間のガイドとなかなか会えなかったのも、マラガ空港でのトラブルで到着が遅れたためである。

翌朝、パリで1泊した荷物を受け取ってから、近くの岩場に出かけた。石灰岩の大きな山である。ルートは難しくないが、12ピッチという長丁場である。初日には少々ハードである。石灰岩特有の、雨で侵食された凹凸の大きい岩を快適に登った。北側の斜面なので、午後からは気温が下がり、寒くなった。まさか使うとは思わなかったダウンジャケットを早速使うことになった。二日目は、同じ山群の南側の岩壁であった。雲一つない快晴で、今度は暑さとの戦いでもあった。

三日目から三日間はいよいよ、ロザリオ村から車で1時間半西に走ったところにある、エル・チョロである。南面の岩壁で、白い壁が眩しい。まるで真夏のような暑さである。初日は4ピッチの短いルートであるが、垂直に近い壁が続き、石灰岩特有のクライミングを楽しむことができた。二日目と三日目は8ピッチと手頃な長さであった。しかし、二日目はクライミングが終わった後、頂上まで登り、大きく迂回して下山したので、車に戻った時にはすっかり暗くなってしまった。クライミングよりその後の方がはるかにハードであった。

五日間のクライミングの後、アンダルシア各地をドライブし、1泊でモロッコまで足をのばした。モロッコのカスバ（昔の要塞跡）から眺めた青い地中海とその向こうのスペイン、そしてジブラルタル海峡を渡るフェリーから眺めた大西洋に沈む夕陽は忘れがた景色となった。

最後にバルセロナに移動し、12年前は工事中で入ることができな



かったサグラダ・ファミリアの大聖堂を見て、スペインの旅も終わりとなった。



エル・チョロを登る



カスバから地中海を



大西洋に沈む夕陽

パキスタン旅行の思い

10期（昭和46年卒）田中 康則

昨年より、夏休は海外旅行をすることにした。今年はヒマラヤ山脈、カラコルム山脈、ヒンドークシュ山脈が合流するポイントがある、パキスタンから中国西部を旅行した。この秘境の旅は予想外に楽しい旅となった。

8月10日、お盆で混み合う成田を出発。北京経由でウルムチへ。深夜にホテル着。8月11日早朝、ウルムチを出発。K2、ラカポシ、ナンガパルバットなどの高峰群を見渡す絶景の山岳フライトでイスラマバードへ。いよいよカラコルム・ハイウェイ大走破の旅である。ガンダーラ最大の仏教遺跡群があるタキシラを見学後、大渋滞のなか、途中レストランで夕食後、深夜にペシャムのホテル着。

8月12日、チラスの岩絵などを訪問しチラスへ。初めてのんびりした一日であった。8月13日、ヒマラヤ山脈の西端、ナンガパルバット（8、126m）等を仰ぎ見ながら桃源郷フンザに向かう。途中、ヒマラヤ山脈、カラコルム山脈、ヒンドークシュ山脈の合流ポイントに立ち寄り、記念撮影。昼食はフンザ地方の名峰ラカポシ（7、788m）のビューポイントで。のどかなひと時を過ごした。



三大山脈の合流ポイントにて



ラカポシのビューポイントで昼食

その後フンザ地方の中心地カリマバードへ。バザールを見学した後、ホテルで夕食。8月14日雨の為、予定していた観光を中止し、ミール城、バルチット城などを見学。夜はフンザ地方の伝統料理と民族舞踏を楽しみ、皆で踊り、フンザの夜を楽しんだ。

8月15日快晴。早朝、ジープでドゥイカル村へ。10分程歩くと絶好の展望地であるドゥイカルの丘に着く。風もなく寒くもない素晴らしい時に夜明けを待った。朝日が照らし出し、ラカポシ、ゴールデンピーク（7、027m）、フンザピーク、レディフィンガー、ウルタル（7、338）など高峰群の朝焼けを展望した。この美しさと神秘さに圧倒され、それぞれに記念撮影などをして楽しんだ。今回の旅行のかけがえのないひと時であった。



ドゥイカルの丘から見たフンザ



朝焼けの高峰群のなかで

その後はホーパル氷河などを見学。カリマバードを後にした。アッタバード湖をボートで縦断し、上部フンザへ。昼食後カテドラルの高峰群、バスー氷河などの景観を楽しみ宿泊地へ。パキスタン最後の夜は周辺には何もないバンガロー風の宿で、明日が最後のガイドさんも加わり、皆で思い思いに夕食を楽しんだ。

8月16日パキスタンと中国との国境クンジュラブ峠（4,733m）へ。国境を越え、広大なパミール高原を走り、タシュクンガル（3,600m）へ。

8月17日専用のバスにて、パミール高原を走り、カラクリ湖などで遊ぶ。スバシ峠を越え、中国最西端の町カシュガルへ。市内観光後、旅行最後の全員での夕食。最終便でウルムチ空港へ。深夜にホテル着。



クンジュラブ峠にて



パミール高原カラクリ湖周辺

8月18日早朝ウルムチ空港へ。北京で中継。夜9時成田空港着。最終の成田エクスプレスに間に合い、品川から自宅着。楽しい旅行でした。
(平成25年11月10日 記)

時間の感じ方 ー長く感じる時間、短く感じる時間ー

11期（昭和47年卒）鈴木 元昭

昨年の11月14日、野田総理が衆議院の解散を宣言しました。国会での党首討論の真っ最中でした。
あれから1年。野田総理の発言が、随分と遠い昔のように感じられます。

あの後、衆議院選挙での自民党圧勝・民主党惨敗、アベノミクス宣言、日経平均の上昇、円安傾向の開始、中国・習近平総書記就任、韓国・朴槿恵大統領誕生、日銀・黒田総裁誕生、アルジェリアでのテロ、橋下徹・慰安婦問題発言、参議院選挙での自民公明圧勝・民主党惨敗・維新敗北、米国債デフォルト危機。これだけの出来事がありました。

一方、自分のまわりでは、随分と時間が早く過ぎていきます。

やっていることは、毎日毎日、特許公報を読み、レポートを作り、お客さまに送ることです。毎日の出社時間、退社時間は常に一定しています。昨年と変化はありません。土日は孫と過ごします。これも去年と同じです。

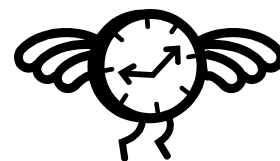
長く感じる時間、短く感じる時間、この感覚の違いはなぜなんだろうか。その原因を考えていたら、ちょっと閃きました。「時感の法則」なるものを発見したような気分になりました。

時感の法則「大きく変化すると時間は長く感じ、変化しないと短く感じる」

なんだか、アインシュタインの相対性理論に似てないことはありませんね。

今年の5月にオフィスが大手町に変わりました。前のオフィスの日本橋のビル時代のことが随分と前のように感じます。これも、大きな変化があったからではないか、と思うのです。

みなさんは、どう思いますか？ (M.S.)



20期～22期白神岳笹内川

22期（昭和58年卒）石川 勤

毎年恒例になった夏の沢。世界自然遺産になり入山制限もある白神山地は、制限されると行ってみたくなる人間の習性でこの数年考えていた。某教授がフィールド調査の目的で入山許可を取り、我々メンバーはポーターとして調査員に加わろうなどといった案である。しかしながら某教授は若い女性隊員を中心に物事を考えてしまう当てにならない性格でもあり、白神山行は長らく実現しなかった。そこで発想を転換し、唯一経験者である20期岩屋を隊長にして、入山制限のない笹内川から白神岳に登ることにした。参加者は岩屋PL以下、21期富士原、22期石川の3名。

7月26日、こまち3号、しらかみ3号を乗り継ぎ十二湖駅に予約していたタクシーにて笹内川に入る。この日は堰堤までの1時間の歩きでテント泊のみのため、途中十二湖の青池を見学。天候を心配していたが幸いにも晴れた。

広々した快適なテンバである。最近ネットで買えるようになったハウス本豆腐で麻婆豆腐をつくる。この数年は高野豆腐を使っていて不味いと不評だったが、今回は好評。15時過ぎより酒を飲む。

7月27日も朝から晴れている。5時ごろ堰堤を出発。歩き始めて1時間ほどでスノーブリッジに遭遇した。7月末の標高400mでスノーブリッジは想定外だった。観察したところ上部が厚く重そうではあるが、穴はあるものの立派なアーチ状となっている。通り抜ける川原部分に障害なく、高巻きも難しい地形のため、一人ずつ潜り抜けることとした。スノーブリッジを抜けるとすぐに魚泊滝が現れた。魚泊滝は笹内川では一番立派な滝であり登れない。右側から高巻きも、草付きがいやらしくザイルを使って尾根に這い上がり、懸垂下降で沢に戻る。その後はしばらく快適な沢歩き。11時ごろ高さは2mぐらいであるが微妙なへつりを要求される小滝が現れ、トップがザイルのみを持って先に進みザックをひとつずつ吊り上げた。このような作業に何故か多くの時間を使ってしまう。

沢登りを堪能しつつ14時ごろ最後の20m滝に着いた。一見して直登は特に落ち口が危なそうなのでやめる。最初に右のガレを登ってみたが、急で落石も懸念され怖いのであきらめた。次に左側の草つきをトライしたがこれも途中で行き詰る。小雨始まる。ここで沢の様子をほとんど忘却していた岩屋PLが現役の時のことを思い出す。「あのときは直登だった。」なんと危ないことをしていたのか。



さて、しかたがないので少し戻り右から大高巻きを開始。すぐに急なヤブになった。早く安全なところにとひたすらヤブを登り、一息ついた時には沢は左側かなり下に見えた。白神のヤブは辛いことで有名なので、どこから沢に戻ろうかなどと考えていたところ天候が変わり大雨となった。ここで、安全第一を旨とする建設会社勤務の富士原がこのままピークまでヤブを漕ぐことを主張し採用となる。富士原トップで1時間漕ぎ、小休止の後トップを岩屋P Lに交代。灌木と笹の強烈なヤブが理由でもあるが、なにやら進みが遅くなる。(岩屋談：心が折れていました。)このまま夜になることを恐れ、トップを石川に交代し更に1時間強のヤブ漕ぎ。17時30分稜線の一番高いところに正確に出て3時間のヤブ終了。

ピークの避難小屋に着いたところには、雨もやみ雲間より日本海に沈む夕日を見た。小屋で身に着けていたものを全部乾して、酒を飲み始めたが疲労のためすぐに眠くなる。テントでなくて本当に良かった。小屋には他に宿泊者1名のみ。人が少ないことが白神の良さでもある。

翌日28日も早立ち。下山後の交通が不便で、五能線に合わせて下りないと帰れないため。普通の道を下る予定が、何故か下り口から間違え二股に下りてしまう。ロープ頼りの急な道だ。下山口に呼んだタクシー(非常に親切)でヴェスパ椿山に行き風呂に入り、快速で向かった秋田で反省会-秋田市名物?チャンポンを食し、解散。



近況報告

8期(昭和44年卒)の佐藤拓哉です

ここ数年、ビデオ編集を生業としているクライマーと、アルパインのクラシックルートのクライミングビデオ製作に力を注いでいます。これまでに、谷川岳10ルート、北アルプス11ルート、南アルプス1ルート、八ヶ岳2ルート、その他2ルートのビデオを作成し、ネット販売している。そのうちの一部はダイジェスト版をYouTubeにアップしているのでご覧ください。

http://www.youtube.com/watch?feature=player_embedded&v=SgXupHwoqpU 谷川岳一の倉沢中央カンテ

http://www.youtube.com/watch?v=8UEqcH40_YI 北穂高岳・滝谷ドーム・中央稜

http://www.youtube.com/watch?v=YNVDdYC_g40 甲斐駒ヶ岳・赤石沢Aフランケ・赤蜘蛛ルート

<http://www.youtube.com/watch?v=lyr1sozHFYs> 谷川岳・一の倉沢・凹状岩壁&子持山獅子岩

<http://www.youtube.com/watch?v=QhgfeCOE1Vw> 前穂高岳・屏風岩・雲稜ルート&東稜

<http://www.youtube.com/watch?v=qBeFsmbsAFE> 谷川岳・幽ノ沢・左方ルンゼ

<http://www.youtube.com/watch?v=1yLvVfgPTIq> 谷川岳・一の倉沢・衝立岩・ダイレクトルート

<http://www.youtube.com/watch?v=TYldgrHF218> 谷川岳・一の倉沢・中央カンテ

<http://www.youtube.com/watch?v=DLwC5LyLNSo> 北八ヶ岳・稲子岳・南壁

<http://www.youtube.com/watch?v=Ojps2GOyjZ8> 唐沢岳・幕岩・大凹角ルート

その他のルートのダイジェスト版も、オリジナル・クライミング・ビデオのホームページにアップされています(<http://www.originalcv.com/climbing/pages/works/exworks3.php>)。

22期(昭和58年卒)の利根川敏です

6月に異動があり(勤務地は神保町のまま)、会社の経営戦略に関連する業務に従事しています。本来は頭脳を活用する部門ですが、事業戦略策定やプロジェクト案件の対応など、夜遅くまで勤務する日々が続いています。

一方、年末年始・GW・夏季休暇など大型連休には、リフレッシュを兼ね時間の許す限り長い旅に出かけています。今年は混乱の続くエジプト、経済発展が期待されるインドやアジア諸国など新たに

6つの国を訪問しました。以下GWに訪問したニュージーランド（NZ）について記載します。

今年（2013年）はエドモンド・ヒラリーとテンジン・ノルゲールがエベレスト初登頂を果たしてから60年目にあたります。NZへの機中で見つけた雑誌の切り抜きをご覧ください。（右が若き頃のヒラリー、○の中にテンジンの顔があります。テンジンはアジア人の顔をしていますね。）

今回のNZ行きは50歳を過ぎた夫婦旅行のため、雪のマウントクックへ登る事はありません。マウントクックが正面に見えるホテルに宿泊し、ヒラリーの銅像前や初冠雪したばかりのマウントクックをバックに記念写真を撮ってきました。

ヒラリーはもちろんNZの国民的英雄ですが、元々は養蜂業を仕事にしていた方です。現地のお年寄りに聞くと何事も大変控えめで、彼の人柄は多くのNZ国民に愛されている様でした。



ヒラリー



ヒラリーのブロンズ



Mt. クックをバックに

OB名簿の管理は、今後とも粛々と続けていきます。メールアドレスが変わったら
s-tonegawa@ac.auone-net.jp（町田市自宅）まで連絡して下さい。

40期（平成13年卒）の二階堂綾子です

初めて原稿を書かせていただきました。H9年入部の二階堂綾子（現：溝口）です。現在、5才、3才、7カ月の3児の母になりました。今は病院で薬剤師をしているため、上の二人が保育園に行っている平日が勤務休みのため、7カ月の子を抱っこ紐に入れて、月1のペース位で筑波山登山トレーニングをしています。本格的な登山から遠のいて6年（長男を妊娠してからハイキング以外行っていません）。来年あたりにはもう少ししっかりとした登山ができるように、鍛えているところです。それから育児で自分のトレーニングの時間が取れないため、仕事の昼休憩の時に30～40分程度ジョギングをしています。子連れ、または1泊位の登山計画がありましたら誘ってください。

新 年 会 の お 知 ら せ

新年会は毎年1月の最終金曜日にいつもの所で行っています。

2014年1月31日(金)18:30 (会費は8,000円の予定)

新橋駅のすぐ近くにある**新橋亭(しんきょうてい)新館**(TEL 03-3580-2211)で行います。

お誘いの上ご出席下さい。特に若い人の出席は大歓迎です。遠くの方でも東京に出張などで来るような場合には、ぜひ出席して下さい。飛び込み大歓迎です。逆に、出席ということになっているのに欠席される方も結構います。これは本当に幹事泣かせ。**予定が変わった時は早めにご連絡**下さい。

連絡先 佐藤拓哉 Tel 046-841-8622 メール: taku0412.and.ogya1103@jeom.home.ne.jp
taku0412.and.ogya113@wing.ocn.ne.jp

<2012年新年会出席者>

(S39)小俣勝男、岡好宗、後藤龍男、松木功
 (S40)小原佑一、島崎質、関川利男
 (S41)相沢宏保、朝倉肇、桜洋一郎、
 佐藤豊治、瀬尾勝之、谷正美、横山雄一郎、
 吉田公平 (S42)新井武、加藤邦明、堤正尚、
 青木祐二 (S43)石川誠之、大木芳正、
 大釜寛修、菊谷清、高橋直樹、藤森英和、
 上田俊郎 (S44)小笠原弘三、佐藤拓哉、
 前田吉彦、水上俊彦 (S45)伊藤健一、
 原田博夫、桃谷尚安 (S46)薄木三生、
 黒田和雄、菅原英行、高野秀夫、高木良博、
 田中康則、若佐則雄 (S47)池田重則
 (S48)神山文範 (S49)岡部安水

以上43名



TUWVOB会 2012年会計報告

(東京口座)

1. 収 入

前回から繰越	370,756
利息	63
計	370,819

2. 支 出

会報 印刷	4,540
送料	4,480
事務用品、通信他	280
次回繰越	361,519
計	370,819

★★ 事 務 局 よ り ★★

- ◇ OB会報44号をお届けします。今回も多くの方から原稿を送っていただき、ありがとうございました。山を続けている人、山から遠く離れてしまった人と様々ですが、同じワングルの飯を食った仲間であることには変わりはありません。
- ◇ メールアドレスが変更になった方は、1ページ目の頭のメールアドレスまでご一報下さい。
- ◇ この会報は原則としてOB会のホームページにアップするだけとし、メールによる配信は行いません。また、これまでメールアドレスが分からない方には郵送してきましたが、原則として、本号をもって郵送は終了します。引き続き郵送をご希望の方はその旨お知らせください。

佐藤拓哉

239-0801 横須賀市馬堀海岸2-23-14

Tel 046-841-8622

